

そしてしばらくたつと、「ああ、ねむたい。なんだかまっ赤なものが、モーッと、まぶたの上へかぶさるような気がします。しばらくごめん下さい。」と言いながら、いきなり長いすの上に横になって、目をつぶってしまいました。王子はそれでもけっしてゆだんをしないで、じっと王女のようにすを見ていました。すると王女は間もなく、すやすやとね入ってしまいました。王子はその長いすのそばのテーブルのところへいってひじをついて、手のひらであごをささえながら、まばたきもしないで、王女の顔を見つめていました。ところがそのうちに、王子はだんだんと

ひとりでにまぶたが重くなって、いつの間にかコクリコクリといねむりをはじめました。ブクブクやナガナガや、火の目小ぞうは、さっきから一生けん命に耳をすましていましたが、ところがちょうど王子がねむりかけるころになると、この三人も、同じようにねむけがさして、とうとうコクリコクリとねてしまいました。王女は王子がグッスリとねむってしま